

---

# アゲイン

カトラス

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アゲイン

### 【Nコード】

N1023D

### 【作者名】

カトラス

### 【あらすじ】

末期の肺がんにおかされた主人公、三浦祐介は意気消沈していた。医者からは入院を薦められていたが、妻との残り少ないと思われる日々と一緒に過ごしたいため、入院はしないでいた。そんな、主人を見て、妻、貴子は海外旅行を提案してきた。目的地は10年前に新婚旅行でいったアメリカであった。

## 楽しい旅行に向かって（前書き）

夫婦愛をテーマにアメリカ旅行を題材にして書いていきたいと思っています。旅行ガイド的、要素もとりいれて描けたらとおもっております。

## 楽しい旅行に向かって

私達夫婦は関西国際空港の北ウィング9番ゲートにいた。

ここにいる理由はもちろん、海外旅行の為なのであるが……

私の気分はともじやないが、海外旅行に行くという晴れやかな気分などではなかった。

なぜなら、私は不治の病である末期の肺がん患者だからだ。

医者から死の宣告を受けたのは、ほんの数週間前の出来事であった。いまだに医者が冷たくいい放った言葉が脳裡にやきついていて。「残念ですが……末期の肺がんです。余命は長くもって、半年かと」

最初はただの風邪だと思っていたのに。体の調子が悪くなったのが、死の宣告をうける三ヶ月前からだった。その時の私は、偶に咳がでて、たんがよくからむといったものだ。きつとタバコの吸いすぎだろう程度に思っていたが、現実には甘くなかった。症状が始めたところに、病院に早くいったらとか、いろいろ考える。しかし、何で私がこのような目に合わないといけないのだろう。他人に迷惑をかけずに、決して贅沢もせず、妻の為に早くマイホームを立ててやろうと必死に働いていたのに。今となつては、子供がいないう事が救いだとも思う。私がいなくなっても、子供がいなかったら妻も、次の結婚がし易いだろうと思うからだ。しかし、ほんとに辛い。体がしんどいワケではない。心が辛いのだ。

私の心の声が叫ぶ！ 死にたくない、死にたくない、死にたくないよ。

私の名前は三浦 祐介。歳は32で、妻、貴子とは結婚して、ちょうど10年目である。職業は地元の小さな信用金庫で働いている。現在は病気治療のため休職扱いになっている。

旅行の目的地はアメリカである。妻、貴子と新婚旅行に行った思い出の場所。医者からは旅行などもつてのほか、すぐに入院して抗

がん剤で治療しなさいときつく言われたが、なにをいまさらと思う。最初は入院して、治療に専念しようかと迷ったが止めた。どうせ、治療といっても、がん細胞を切除して直せるレベルでもないだろうし……それなら、あと数ヶ月、妻と少しでも一緒に過ごしたかったから。妻にその事をいったら、初めは、涙をうかべて反対していたが、自分の思いをぶちまけたら、理解してくれた。そして、それなら旅行にでもいきましよう」と提案してくれた。

「あなた、今まで働きづめだったでしょう。どうか行きましようよ。楽しましようよ、何かの本で、笑ったり、楽しんだりしたら、ガン細胞の増殖がおさまったって聞いた事があるわよ！ だから、これからは、笑って生活しましようよ。奇跡だつてあるわよ、きつと、きつとね」

そうだ、妻の言う通りだと思った。くよくよしてたつて良い事なんかはないと思う。でも、やはり、ウキウキした気分にはなれなかった。

旅行の段取りは全て妻がしてくれた。妻の話では、とんでもなく豪華なプランであつた。

「贅沢にいきましようよ」

私達にお金の心配は無かつた。なぜなら、生命保険のリビングニーズという契約が適用されたからだ。すぐに保険会社からは私の銀行口座に5千万円という大金が振り込まれたからだ。いわゆる生存前給付金、私のように死の宣告を受けたものだけが得られる唯一の特権といったところだ。

「全部使うつつもりで、旅行楽しみましようね」

愛する優しい妻は。そう言ってくれた。

「全部つて、ダメだよ！ 俺がいなくなつた後、おまえの生活のためのお金なんだぞ」

私が強く言つても、妻は笑顔でこつ言うだけだつた。

「私の事は心配しないでいいの。生活なんて、なんとかなるわよ！ だつて働いたらいいだけでしょう。それに。私美人だから、すぐ

に金持ちの男性がすりよってくるわよ」

お世辞にも美人だとはいえない妻だが、性格はぴかーに明るく、そして優しい。私にはもったいない妻。

ああ、死にたくない。死にたくない。死にたくないよ！

出発ロビーにいる人々。私達のように、これから出発する者、日本旅行を楽しんで、これから帰国する外国人の人、それぞれが、いろんな思いで飛行機の出発を待っているロビー、出発30分前になって、ようやく、私の心が晴れた。

よし、思いっきり、旅行を楽しもう。くよくよしたって一緒じゃないか！ 妻との思い出をいっぱい作るぞ！

「あなた、何、なに。何かおもしろいことでもあったの？」  
私が楽しそうな表情をしていたのか、妻が聞いてきた。

「うん。旅行の事、考えたらウキウキしてきたよ！ おおいに楽しもうじゃないか」

ロビーからは搭乗を促すアナウンスが流れた。搭乗の順番は一番高い席をとっているものからだ。

私達はファーストクラスに初めて乗る。搭乗券を握り締めて、搭乗ハッチに進んだ。金髪の客室常務員が一行にならんで、たどたどしい日本語で、「ようこそ、ユナイテッド航空へ」と言って頭を下げている。

そして、コックピット正面前のゆったりとしたソファ式の座席に腰をおろした。

「凄いわね、凄い、凄い」

妻はおおはしゃぎであった。妻の満面の笑みを見て、私は楽しい旅になりそうだと実感した。いや楽しい旅にしようじゃないか！

## 12時間空の旅(1)

私達の乗っている飛行機はボーイング777型機というもので、搭乗人数は550名の大型ジャンボジェット機である。この情報は座席の前にある液晶モニターに書かれていた。なんでもユナイテッド航空の主力航空機のようなのである。液晶モニターは時々、画面が切り替わり、今見ている画面に世界地図で出ていて、ユナイテッド航空の周航地が地図上に点正在しているものだった。流石にアメリカにおいての二大航空会社の一つ世界中あらゆる地域を周航している。私が液晶画面に夢中になつてる間に、妻の貴子は、リクライニングシートの位置調整に奮闘している。

「やっぱあ、ファーストクラスって凄いよ！ 祐ちゃん」

貴子はシートを最大限、後方にねかせて天井を見ながら言った。

「これだったら、楽だし、長い搭乗時間も苦にならないわ。それにね、このシート、電動マッサージもついてるのよ！」

貴子の少し出始めたお腹周りの脂肪がプルプルゆれていた。

「気持ちいい」 貴子はどこかのCMで聞いたような、素っ頓狂な声をあげている。

「ところで、飛行機に何時間ぐらい乗るの？」

「祐ちゃん、なにい、いまごろ眠たいこといつてるのよ！ 12時間ぐらいよ」

そうであつた。旅行前に貴子がさんざん言っていたような気がする。といつても、私は旅行の事は貴子に任せきりで、ほとんど日程等は知らないでいたのだ。心に余裕がなかったからだ。で、一体いまから、どこに向かうのだろうか？ わかっているのはアメリカに行くということだけ。どこに行くのか貴子に聞いてみようかと思うが、また怒られそうだしなあ。でも、確かあ、10年前に行った新婚旅行の場所に行くといつていたので、きっとハワイに行くのだろうな。そうだ、きっとハワイだ。ハワイに違いない！

「なあ、貴子。ハワイは11月でも暖かいだろうね」

「はあ？　ハワイって！　祐ちゃん、夢でも見てるんとちゃう？

これから、私達が向かうところはシカゴよ、シ・カ・ゴ。それに、ハワイだったら12時間も飛行機に乗らないでしょう。ほんと、祐ちゃんって昨日、私が言った事、全然聞いてないのね」

「はい、上の空でした。どうもすみません」

私は貴子になじられて、少しムツとしたが、ここは素直に謝っておいた。

「ところで、シカゴまでの航空運賃っていくらぐらいなの？」

「一人、75万よ」

「75万って、めちゃくちゃ高いじゃないかよ！　乗るだけで新婚旅行の総費用と同じくらいじゃないか」

私は、あまりにも高額料金に声を荒げていた。

「贅沢にいくと言ったでしょう。それにね、これでも節約してるのよ！　JALだとね、130万はするのだからね！」

そうなのか、ファーストクラスってそんなに高いものだったのか、せいぜいエコノミーの3倍程度の料金だと思っていた考えが浅はかだった。そりゃ、シートがイタリア製本皮レザーで電動マッサージ機能が付いてるのも当然のことなんだな。

「それえ、祐ちゃんもお試しあれ」

貴子はシートのボタンを押した。腰部分が揺れた。私のお腹の脂肪が揺れる。確かにい

「気持ちいい」である。私も素っ頓狂な声を上げていた。

二人で大笑いした。

「ところで祐ちゃん、さっきから思ってるのだけど、咳でてへんね。今、しんどくないの？」

そういえば、咳はロビーにいたときから止んでいる。体調もしんどくない。

「うん。今のところ調子いいみたい」

「よかったわね。もしかして、治ったんちゃう？」



そんな、簡単に治るかボケェ！ と私は思ったが、貴子があまりに真顔で言ってるので、私は可笑しくなった。

「うん、治ったりなんかして。祐ちゃん、めっちゃ調子いいわ」

「でも、よく考えたら、治るわけないわね。ごめん、ごめん病気の事思いださせてしまったわね。忘れてちょうだい」

貴子は軽い感じでサラツと言った。私は谷底に落とされたような気分になったが、これも、貴子流の優しさだと思うことにした。こうやって、いつも、おちゃらけてるのが貴子なのだから。

突然、ピンと音があった。機内放送が流れてきた。

「当機はまもなく、離陸いたします。シートベルトをおしめ下さい」  
イントネーションは少し違うものの、流暢な日本語であった。シートの前面に取り付けられている液晶画面もさきほどまでの周航地のマップ画面から切り替わり、シートベルトを締めるよう指示されている。

私達は、程よい位置にシートを合わせると、ベルトを着用した。

5分ほどして、ゆっくりと機体が滑走路に向かって動きだす。

私はあまり飛行機に乗った事がないので、離陸に対しての不安と興味がいりみだれて、少し複雑な気分。

機体はゆっくりと右に舵をとると滑走路に踊りだした。時刻は午後6時45分、もう、すっかり暗くなった外の景色は滑走路につけられてる誘導灯がちかちか光を放っていて、実に綺麗であった。

滑走路に入った途端、機体はエンジンに火が入ったのか、グオーンという低音を出して、急激に加速を始めた。30秒後にはフワツト浮き上がる感じがして機体は陸地から飛びたっていた。

上空に舞いあがった機体。機体の小窓からは、雲の切れ間から見える大阪の街の夜景が美しい。

こうして、無事離陸を遂げた、ボーイング777型機はシカゴに向かって、私という末期肺がん患者を乗せて飛びたったのだった。

## 12時間空の旅(2)

機体が離陸してから5分ほどでシートベルト解除の機内放送が流れた。それと同時に液晶パネルの内容も切り替わり、画面内には現在の機体の位置、飛行速度、風向き、シカゴまでの到着予想時間およびシカゴまでの残り距離がマイル表示されている。液晶情報によると、到着までは12時間26分かかるみたいである。飛行機の速度は時速1000キロ出っていて、日本から米国に行く場合は1000キロほど速度が上がるのだった。それは追い風に乗るためであったのだが、私にとっては、このような重い機体であっても風の影響を受けるのだなあと不思議に思ったりする。貴子にその事を言つと、「そんなの翼があるからじゃない。あたり前でしよう」と軽くあしらわれた。

貴子はくつろぎモードに入ってるみたいで、お腹の脂肪がまたしても、プルプルゆれている。

さてと、私もくつろごうかと思った時、おいしそうな匂いが機内に漂ってきた。そうだ、まもなく機内食の時間なのだ。今、時計は午後7時を少しまわったところなので、機内食はディナーにあたるファーストクラスの機内食っていったいどんな食事ができるのだろうか？ 実に楽しみである。

貴子の方も匂いを察知したのか、シートの前に置いてあるユナイテッド航空のパンフレットを読み出した。

私も貴子と同じようにパンフレットに目を通す。パンフレットには、ご利用出来るサービスと書かれており、私は機内食のページをめくった。機内食のメニューは2種類あつて、洋食が中心のメインコースと日本人向けに幕の内弁当が選べるみたいだ。私がまじまじと、パンフレットのメニューとにらめっこしていると、貴子が話しかけてきた。

「ねえ、祐ちゃん。どっちにするのよ？ 私はもちろん、メインコ

ースにするけど、祐ちゃんは思い切って、幕の内弁当にしてみたらどう？ 同じ物頼んでも面白くないやん」

私はメニューを見たときから、幕の内弁当って……という気持ちがあったので、貴子の奴、とんでもないこと言っけやがってると思っただ。私は、ここでの選択肢はメインコースに決まってるだろうと思っっている。だって幕の内弁当って、よく昼飯に仕事場で私が食べてる定番メニューじゃないかよ！　なんで、ファーストクラスに乗ってまで、定番メニューをデイナーに食べないといけないだろうという気持ちが強かった。

「貴子の方こそ、弁当にしたらどうなんだよう」

「いやよ、何でコンビ二弁当みたいなもの、ファーストクラスに乗ってまで食べないといけないのよ！　祐ちゃんって、ほんとアホなんだから……」

やはり、私の妻、貴子は只者ではなかった。この場においても私を実験体にしようと思っていたのだ。

そんな機内食選択のやり取りを貴子としているうちに、前列から順番に金髪スッチイー、いや客室乗務員が食事のオーダーを聞きにまわってる姿が見えた。

前列からスッチイーの声が聞こえてくる。

「May I take your order？」

なぬうゝ、注文を英語でとっているではないかあ！

「おい、おい。貴子やばいよあ！　注文英語でとってるよ」

「なにい、祐ちゃん、アワアワしてるのよ！　こんな時のために、学校で英語教えてもらったのでしょ！　なんとかなるわよ」

「それじゃ、貴子お、俺の分の注文も頼むよ！」

私はちなみに、英語は大の苦手である。

「しょうがないわねえ、そんな意気地の無い事でどうするのよ！　注文してあげる代わりに、祐ちゃんは幕の内弁当よ！」

「ええ！？ 頼むよ、貴子。俺もメインコースにしてくれえ！」

「バカねえ、冗談よ、冗談。祐ちゃんもメインコースにするから」

ふう、私は貴子の洒落にならない冗談にひと安心した。しかし、私に一つの不安がよぎった。

貴子の奴、英語話せたっけ？ たしか、新婚旅行の時は全くダメだったはずだ。でも、きっと大丈夫なはずだ。貴子の顔は自信で満ち溢れているではないか！ 早く聞きに來いって感じの顔じゃないか。

いよいよ、スッチイは一つ前の乗客に注文を聞いている。前席の乗客は私達と同じ日本人であった。

どう受け答えするのか観察してやろう。きっと私と同じで英語など出来る筈は無いだろうと思っていた。

しかし、前の乗客は英会話をしていた。全て英語で注文している。ファーストクラスに乗る乗客は英会話ぐらい出来てあたり前なのだろうか？ しかも、観察しているはずの私は、前の乗客が何をいつてるのかさえわからない。唯一わかったのはYesとThank youぐらいなものである。

そして、スッチイは私達の席にやってきた。私は緊張して、心臓がドキドキしていた。

「貴子、貴子さん。注文を聞きにきましたよ」

貴子はプルプルさせているマッサージ機のスイッチを切ると、ゆっくりと電動シートを上昇させた。私は貴子の自信満々の表情と寝ていた体がゆっくりと起き上がってくる姿に、なんだか頼もしい感じがした。

スッチイは貴子のシートの横に立つと腰をかがめて笑顔で話しかけてきた。

「Excuse me、May I take your order？」

私は貴子の英会話に期待した。貴子はスッチイの質問に対して

第一声を発した。

「ハアハーン、ハアハーン！」

この一体「ハアハーン」って？ なんだあ？ おそらく、貴子はよく洋画で見るあいづちをうっているのだろう。日本語でいうところの、「うん、うん」とか「はい、はい」といったところであろうか、しかし、イントネーションが違うような感じがする。

「I'd like to order, please」

「ハアハーン、ハアハアハーン」貴子のあいずちが機内にコダマする。

「ハアハーン」

「貴子さん、スッチィーは何を言ってるの？」

貴子は私の質問に即答した。

「はつきりいつて、この人、何言ってるのかわからんわあ」

そ、そんなあ、わからんってえ！ やばい、やばすぎる状況。

「どうするんだよ」

「祐ちゃん、あせるなってえ、こんな時の為に秘密兵器があるんやあ」

秘密兵器っていったい何なんだ。

貴子は機内に持ち込んできたポーチを取り出すと、中をまさぐりだした。

スッチィーには「ちよつと、Wait」とスッチィーの顔に手のひらを見せている。

ポーチの中から出てきたのは、電子手帳であった。

おお、こんなものがあるのだったら、スッチィーが聞きにくる前に準備しとけよと思ったが、今更どうにもならない。貴子は素早く電子手帳の電源を入れると、電子手帳のメニューから、海外旅行でよく使う場面別英

会話という項目をクリックした。

「祐ちゃん、さっきこの人、何て言っていたの？」

「え、そんな事、覚えてないよ！」

「思い出してよね、出ないと検索できないじゃないの」

スツチーはそんな私達のやり取りを知ってか知らずか、流暢な日本語で話しかけてきた。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

私達夫婦はお互い顔を見合わせ、声を揃えて「日本語話せるやん」後から思えば、スツチーが日本語が出来て当然といえば、当然なのである。なにしろ、この飛行機は日米周航便なのだから……

日本語が出来るのなら、もう遠慮はいらない。

「メインコース2つお願いします」

「はい、かしこまりました。お飲みものはどうされますか？」

「飲み物ってどこにメニューあるの？」

「はい、今お持ちのパンフレットの一番後ろのページに載っております」

私達は早速、ページをめくった。パンフレットにはファーストクラスでご利用できる飲食物と書かれており、カラーでワインの写真が載っていた。その下にメニューがたくさん書かれている。

飲み物は、アルコール類では、ビール、白ワインの赤ワイン、リキュール、オリジナルカクテルにシャンパン、ワインそれに日本酒、焼酎、ウイスキーにブランデー、スピリットとなんでもござれ状態。ノンアルコールは紅茶に日本茶、コーヒーといったところである。

流石ファーストクラス、凄いメニューの数である。新婚旅行で乗った飛行機では、せいぜいビールかコーラーしか飲んだ記憶が無かった私は感動で目がうるうるした。

貴子はメニューの中からカリフォルニア産白ワインのシャルドネを注文した。私はとりあえず、まずはビールからと思い「バドワイザー」と言った所、貴子が首を横に振って、スツチーに、

「日本茶お願いします」と言っていた。

「祐ちゃん、お医者さんが、薬の効きが悪くなるから、アルコールはダメだと言ってるのでしょ。だから、あなたは、お酒はおあずきよ！」

そうであつた。アルコールが飲み放題だと思つていたのに、すっかり現実に引き戻された。

仕方がないかあ、少しでも旅行を楽しむ為だ。アルコールは我慢しよう。食事が終わったら薬も飲まないといけないなあ。私は少々、貴子の指示に従つた。

「以上でよろしいでしょうか？」

スッチィーは私達の注文したオーダーを繰り返すと、軽くお辞儀をした。

私は知つてゐる唯一の英語 Thank you をスッチィーに言った。貴子は私の英語に対して軽く「ハアハーン」とあいずちをつつた。

## 12時間空の旅(3)

機内は慌しく、客室乗務員が手際よく機内食を各座席に配り初めていた。さきほどまで静かな10席ほどしかないファストクラス乗客も機内食が配られるとざわめきだしていた。私達の席にも客室乗務員がメインデッシュが盛られたプラスチックの皿を片手に持つと、シート前面にある収納式テーブルを引っ張りだして料理の盛った皿を笑顔でおいてくれた。高級レストランのフルコースのように一品ずつ料理をもってきてくれるわけではないが、それでも、料理は素晴らしい内容のものである。料理の横には、お品書きなるものが置かれていて料理の詳しい名前が記載されている。

メインデッシュは舌を噛みそうなネーミングが書かれている。仔羊肉のソテー香草風味と仔羊肉のプロヴァンス風トマトソース和えコンビーネーションミックス添えとなっている。貴子はお品書きを見て一言。

「なんのこっちゃ？」

メインデッシュの横にはサラダが上品に盛られている。大海老とトリュフの山海ミックス風サラダ。

貴子はさらに一言。

「なんでも、風ってつけたらいいものとちゃうでえ！」

確かにメニューのネーミングに関しては貴子の言う通りのような気がする。ちなみにスープはミネストローネスープである。スープからは美味しそうな匂いと湯気がたちこめている。

「それじゃ。いただきますしょうか」

「うん」

私達は手を合わせて合掌のポーズをとると、ビニールの袋に入ったフォークを手にとった。

さてと、どれから頂くのかなあ。そういえば最近、食欲がわくな



んて無かったような気がする。

私は、まずスープを口につけた。スープはいつ調理したのだろうと思うぐらい温かくて、口に入れたとたんマイルドなトマトの味が口いっぱいに広がり食欲をうながしてくれる。次にバスケットに入っているぶどうパンをちぎって口に入れた。まんべんなくパンに混じっている干しぶどうの甘みが良い、ひさびさに食事が美味しいと感じた。貴子の方はラム肉を口に入れていた。貴子はまるで、料理番組のタレントになったかのように、肉を噛みしめながら、うんうんと首を軽く上下に振っている。

「祐ちゃん。この肉、むちゃくちゃ軟らかくて美味しいわあ、はよお、食べてみい」

私は貴子に促されるように仔羊肉にフォークをさして口に入れた。貴子の言ったように、肉は大変軟らかくて、ラム肉特有の臭みがなく、肉を噛んだとたんに肉汁が口内に広がり美味しい。

「ほんまあ、美味しいなあ！」

「でしょ、でしょ」

パンフレットに書かれている一流シェフが丹精込めて作りあげていますってのは伊達じゃなかった。

よし、次は山海サラダを食べてみよう。レタスを中心にした野菜の上部には白い粉チーズのようなものがふりかけられていて、中には黒っぽい固形のもものが混ざっていた。サラダの周囲には食べやすいように、ボイルされた大海老がサラダを取り囲むように6匹盛られている。パンフレットの山海サラダ注釈には、最高級黒白トリュフのハーモニーをお楽しみくださいと書かれている。なるほど、この粉チーズのようなものが白トリュフで黒っぽい固形のもものが黒トリュフなんだなあ。うーん。世界三大珍味の一つトリュフって一体どんな味がするのだろうか？ 私は、恥ずかしながらトリュフなるものを食したことが無かったので、食に対する探求心が巻き起こりワクワクしていた。でわでわ、白トリュフをいただきますか。

私はレタスごと白トリュフを食べてみた。

白トリュフの味は少しマイルドな酸味があつて上品であつた。早速貴子に感想を言つてみた。

「白トリュフ、むちゃくちゃ美味しいなあ。なんて言うかあ、このマイルドな酸味がたまらんわあ」

貴子は少し返答を考えたのか間をあけて言つた。

「ハアハーン、何言つてるの祐ちゃん！ マイルドな酸味つて！ハアハーン、それはサラダにかかつてるドレッシングの味よ！ トリュフってのは、ほとんど無味でせいぜいしてもナッツみたいな味なのよ」

ガーン。そうだったのか、しらなかった。しかし、貴子のやつはどうして？ 私が食べたことが無いトリュフの味を知っているのだから不思議である。よし、聞いてみよう。

「なんで？ トリュフの味知ってるんだよう。そんなもの一緒に食べたことかないだろう！」

貴子は即答であつた。

「ああ、あなたがいないときに、近所の主婦仲間なんかと、ランチなんか一緒に行って食べたことが何度もあるのよ！ ハアハーン」

ガーン、ガーンである。私は非常にショックであつた。聞くんじやなかったとも思う。しかも、ランチだとお、私が少ない小遣いでマイホーム購入のために、昼飯を、今日は牛丼にしようか、100円マックで安くあげようかとやりくりしているのに、貴子ときたら……正直頭にくる。さらに、なんだ、このハアハーンと言う、人を小バカにしたような言い草は……それに、俺は外人じゃないし……

「どうしたのよ？ 何い、むくれているのよ」

「別にい、ちよつと考えることとしてただだよ」

私はやけになつて大海老だけを残して、一気に白黒トリュフのサラダを平らげた。

それを見て、貴子は言つた。

「もっと、味わつて食べなさい。めつたに祐ちゃんはトリュフなんか食べられないのだから……」

やはり、この女、いや私の妻貴子は只者では無い。私を傷つけたことなど、全く知る良しもないのだった。

しかし、貴子の言動は今に始まったことじゃないし、いちいち気にしていたらきりが無いので、私は忘れる事にした。さあ、気を取りなおして食事を楽しもうじゃないか！ その4に続く。

## 12時間空の旅(4)

私は気を取り直して大海老を一匹口に入れた。

プリプリした海老の食感が口に広がる。実に美味しい。

貴子の方は、客室乗務員に白ワインをプラスチックのグラスに注いでもらっていた。

貴子は、グラスをかつこをつけて少し傾けると、中の褐色の液体をころがした。それからワインを少しだけ口に含みクチャクチャと音をたてた。

私は貴子になんで普通に飲まないのか聞いてみた。

「祐ちゃんって、ほんと、なんにも知らないのねえ！ 真のワイン通は、こうやって最初の一口でワインの味と香りを楽しむものなのよ！ ハアハーン」

そういうことだったのか、しかし……貴子はいつからワイン通になったのだろうか？ 普段からワインを飲んでいるのなら分らない気もするが、私は貴子がビール以外のアルコールを飲んでいるのを見た記憶が無い。さらに、貴子は講釈を続ける。

「このワインは凄く高級なワインなのよ。色が濃いでしょ。それだけ熟成してるってことなのよ。それに、香りも、いろいろな匂いが混じっているのよ。レモンの匂いにオレンジの花、ライムの匂いも混じっているわね。やっぱり、ワインはボルドー産に限るわあ！」

ワインはボルドー産？ 貴子が注文したワインはたしか……カリフォルニア産だったようなあ。いやいや、細かいことはいわないでおこう。せつかく二人とも美味しい料理を堪能しているのだから。

貴子はワインを一気に飲み干した。

「ほんと、ボルドーワインはおいしいわあ！ ぐいぐい飲めちゃう。祐ちゃんスッチー呼んで、ワインの御代わりってちょうだい」  
「そんなの自分で言ってくれよ！ 貴子の方が通路側なんだから、スッチー呼びやすいだろう。それに、どうやって呼んでいいか、

俺わからないよ」

私はしばしの抵抗を見せたが、無駄のようである。

「祐ちゃんの肘掛に呼び出しボタンあるでしょう。意地悪言っでないで、ボタンを押して呼んでよ！　今、私は手がふさがっているのよ」

確かに貴子の手はふさがっていた。貴子の左手は私の腹をつまんでいるのだから……

私は腹の痛みから解放されるべく、呼び出しボタンを押した。すぐに客室乗務員がやってくる。

「ワインの御代わりお願いします」

「さきほどと同じ物でよろしいでしょうか？」

私はわざと言ってやった。

「はい。カリフォルニア産の白ワイン、シャルドネお願いします」

貴子の顔を確認した。貴子は「フフウ」と不敵な笑みだけ浮かべていて、何も言わず不気味であった。

「かしこまりました」

客室乗務員が詰め所に戻っていった。

その時であった……

私の皿の上にあった大海老5匹のうち、1匹が貴子のフォークによって突き刺され、私の目の前を宙にうかんで泳いでいく、とても優雅に時間が止まったように、そうして貴子のマウスに吸い込まれていった。

「うおおおお」

私は叫んでいた。せ、せっかく楽しみに取っていた、大、大海老が……

「な、何いするんだよお」

貴子は満足気に大海老を食している。

「祐ちゃん、何モゴモゴ言っているのよ。海老嫌いだから残していったんでしょう。ハアハーン」

私にもはや、貴子に言う言葉は無い。なぜなら、私は海老は好物だから、その事は貴子も周知の事実であるからして……

それから、私達夫婦は一时间ほどかけてディナーを楽しんだ。実際には貴子だけ楽しんでいたのかもしれないが、貴子は、その後、何度もカリフォルニア産白ワインを御代わりして、すっかりご機嫌であつた。

ちなみに私の大海老の半数が貴子の胃袋に入った事はいうまでもない。最後の1匹の大海老が貴子のマウスに入つたあと、貴子は一言、真つ赤になつた顔で言つた。

「ワインの注文の時、意地悪した罰よ！」

やはり、そうだったのか！ 全く口は災いの元だと身を呈して実感したひと時であつた。

食事が終わつた後、私は液晶モニターを見た。

もう地図上には日本列島の姿はなく、地図上には、ひたすら青い画面の太平洋が広がるばかりの退屈な画面である。飛行機の手速は相変わらず1000キロを維持していて、シカゴまでの到着時間は残り10時間22分となつていた。ちょうど、関西国際空港を飛び立つてから2時間を経過したところだろうか、まだまだ、シカゴまでの道のりは長い。ほんとに遠い国アメリカ。

私は映画でも観て時間をつぶそうかと考えていた時、貴子が話しかけてきた。

「祐ちゃん。薬、薬飲まないとかかんよ」

そうであつた。私は現実には引き戻される。私は健康な体で旅行しているのでは無い。必ず、食後には医者から大量にわたされた薬を飲まないといけない。貴子は呼び出しボタンを押して、客室乗務員に水を頼んでくれた。私は毒蛇のようなイヤラシイ色をしたカプセル二錠を口に入れた。さきほどもでの、楽しい食事と違って嫌な時間である。続けて、残りの薬も我慢して飲んだ。私の嫌そうな顔を察してか、貴子は優しく言ってくれた。

「祐ちゃん、我慢、我慢。我慢。また咳がでたら、苦しいでしょ。楽しい旅行をする為よ、我慢、我慢、我慢」

貴子の言う通りである。あの発作が出たら、ほんとに苦しい。全ては楽しい旅行を楽しむためだ。

続く。

## 12時間空の旅(5)

飛行機は太平洋海上を高度一万メートルを維持して優雅に飛んでいる。もし、機内に天窓があったなら、きつと満天のプラネタリウムのような星空を眺められるのに違いないと思う。そんな、少しロマンチックなことを考えていたら、突然激しい睡魔が襲いかかってきた。恐らく食後に飲んだ薬の為であろう。せつかく新作映画を見ようと思っていたが、やはり睡魔には勝てない自分がいる。

貴子の様子を見ると、デザートハーゲンダッツのアイスを美味しいそうにほおばりながら、音楽でも聴いているのか、簡易式ヘッドホンをして小声で歌詞らしきものを口ずさんでいた。

私はリクライニングシートを最大限に倒すと寝る体勢に入った。

「祐ちゃん、寝るの?」

「うん。薬飲んだら眠たくなったよ」

貴子は備え付けの毛布を体にかけてくれた。

「これも、使うといいよ」

貴子は飛行機に乗る前に、免税店で買った安眠セットなるものをわたしてくれた。

早速、私は安眠セットのアイマスクと耳栓をすると瞼を閉じた。

「おやすみなさい」

貴子が、私のシートの照明を切るスイッチの音が聞こえた。

すぐに、脱力感と共に眠気がおとずれる。そして、私はもの5分としないうちに眠りの世界に入った。

私は夢を見た。

夢の中では、今にも壊れそうな木造式のアパートから親子が出てきた。母親は道路に出ると、子供の手をつないで歩き出す。手をひかれている黒いランドセルを背負った子供は私であった。母さんの



顔は少し強ばっているように見える。母さんは私の手を強く握り、ぐいぐいと私を引っ張って歩いていく。そうだ、この夢は、父さんが肝臓ガンで死んでしまつて、生活のために引越しをして初めて転校先の学校に登校するところじゃないか！ 場面が変わつて、私と母さんは校長室にいる。母さんは校長先生に何度も頭を下げていた。

「学童保育に入れます。校長先生どうぞ、この子をよろしくお願いします」

そうだ、この日から授業が終わると学童保育に預けられたんだ。校長室に若い女の人が入ってきた。

「祐介君の担任になる星野先生です」

校長先生は女の人を母さんに紹介した。

そうだ、そうだ、星野先生だ。夢の中で記憶が蘇る。いつも、優しく、私の面倒をよく見てくれた美人の星野先生。

クラスみんなが、私に注目している。教壇の前に立つてる私……なんだか、とても恥ずかしい。

「転校生の三浦祐介君です。みんな、仲良くしてあげてよ」

星野先生がクラスメートに紹介してくれている。

「みんな、返事」

「はい。先生」

でも、クラスメートの返事は嘘だったんだ。転校してからしばらくの間、みんなにいじめられたんだ。

体育の授業だろうか？ ドッジボールをクラスメートとしている私。相手側にボールが渡ると、みんなは私の顔面めがけてボールをなげてくる。私は必死に逃げ回る。でも、無情にもボールは私の顔を捉えている。

勢いよく後方に倒れこむ自分の姿が見える。みんながケラケラ笑っていた。

たった一人の女の子を除いては……

「ええ加減にしときゃあ。祐介君かわいそうやろ」

おさげ頭にクリクリした目をしたその女の子は、少し怖い顔をしてくラスメートに意見した。

私にとつては、見覚えのある顔。みんなに意見してくれた女の子は、私の妻……貴子であった。

「転校生いじめて、何がおもしろいねん。祐介君も負けてたらあかんでえ、やられたらやり返すんやあ」

確かに貴子の言う通りだと思っただが、貴子はクラスメートに比べて一回りぐらい体が大きい。体格がいいのだ。それに比べて、私は痩せていて貧弱に見える。貴子が大根だったら、私はもやしみたいなのである。

それゆえに、クラスメートにいじめられていたのじゃないかと思っている。

ボールが当てられたので外にでた私に、ボールがパスされた。さつき私にボールをあてた奴にリベンジするチャンスがおとずれた。私はクラスメートの一人に照準を合わせてボールをふりかぶった。そして投げようとした時、大地が揺れた。地震かと思った時、夢から覚めた。

目覚めると、機内放送でシートベルトを締めてくださいとアナウンスされていた。どうやら、夢の中で地震だと思ったのは、飛行機が乱気流にもまれて少し揺れただけのことである。しかしながら、少々夢の続きが気になる。そのあと、どうなったのだろうか？ クラスメートにボールを当てる事ができたのだろうか？ うーん思いつけない。ただ、わかっている事は、あの日のドッチボールをきっかけに、貴子に知り合う事になったのと、クラスの人々とそれ以降、急激にうちとけあう事ができたということだった。貴子に助けられたのだった。

「祐ちゃん。起きたんかあ」

「うん」

「さっきの揺れで目覚めたんやなあ。なんか、うなされていたみたいやけど、怖い夢でも見たんか？」

「怖い夢とちゃうけど、懐かしい小学校時代の夢みてたんや」

「そうかあ、小学校時代の夢か、私、夢の中ででできたの？」

「うん。でできたよ」

「可愛かったやろ」

「うんうん。頼もしかったよ」

「頼もしかったあ？ いったいどんな夢みてんねん」

「まあ、ええやん。ところで、貴子はなんで目に涙うかべてんの？」

貴子の目は涙目になっていた。

「そやそや、祐ちゃん寝てる間、映画みてたんよ」

「何の映画観てたの？」

「ハリポタの不死鳥の騎士団」

「感動して泣いてるの？」

「違うよ。ロンがあまりにも、不細工な顔になっていたので、おもしろすぎて涙がでできたの！ 子役の時はおぼこい顔してたのに

よくもあそこまで変貌したものやわあ」

「どうやら、聞いた私がバカだったようだ。とりあえず、ハリポタのロンさんよ、ごめんなさい。」

「こんな妻を許してやってください。」

「見て見て！ 祐ちゃん。ほんまあ、ロンの顔おもしろいなあ」

貴子はそう言って、液晶の画面に写しだされているロンの顔を指差して笑っていた。

ドリフのコントじゃないが、私の心はダメだこりやである。

## 12時間空の旅(6)

あいかかわらず、私のシートの液晶画面は青一色の太平洋と縦に一本、日付変更線が表示されているだけの退屈なものである。シカゴの空港までの距離は8000キロをきつたぐらいの位置表示。ということは、私は3時間弱ほど寝ていたことになるのかな？ とにかく、あと8時間ちよつとでシカゴにはつくみたいである。貴子は口の事をバカにしながらもハリポタを夢中で見ている。私はさっきの夢のせいか、映画を観る気にならなかったので、貴子が持っていた電子辞書をいじってみることにした。とりあえず、今から行くシカゴつと。電子辞書によると、シカゴはアメリカで三番目の都市のようだ。イリノイ州にあつてミシガン湖のほとりにある街。農業も工業も発達していて、アメリカにおいて水陸交通の要のようなところ、日本でいったら名古屋つてところなのだろうか？

ご丁寧に漢字で書くと「市俄古」になると電子辞書は教えてくれた。結構、電子辞書って便利なものだなあ。私がシカゴにもっているイメージはピザなのであるが、そんなことは全くもって書かれていない。

「ああ、面白かった。祐ちゃん、何してるの？」

どうやら、貴子が観ていたハリポタが終わったみたいであった。

「うん、今から行くシカゴをちよつと調べていたのさ、ところでシカゴのどこ観光するの？ 行くとこ辞書で事前に調べてみるよ！」

「ハアハアーン？」

私は嫌な予感がした。それと、この貴子の「ハアハアーン」は、字幕で映画を観た影響であろうか、さきほどまでのイントネーションと違い、よりやばい方向に向かっているように思える。そして、予感は見事なまでに的中した。

「シカゴで観光なんかせえへんでえ。あそこは飛行機乗り換えるだけよ」

私のほうこそ「H A H A - N ?」である。飛行機乗り変えるって、いったいどこに連れていくのだよ貴子さんよお？ まさかアラスカ行くとか言っんじゃないだろうな！ 私はビビりながら聞いてみた。「で……どこ目指すの？」

「花の都ニューヨークよ」

花の都って、違うだろうよ、貴子さん。

「ニューヨークに行くのかあ？ だったら乗り換えなんて手間かけないで 直行便でいいじゃないの？」

「予約がとれへんかったのよ。急に決まった旅行だから仕方ないでしょう。なんかあ文句あるん？」

そうだったのか！ どうりで……あのお喋りな貴子がシカゴの話題をしてこなかったわけだ。

「祐ちゃん。そんなことより、シカゴで入国審査あるのだから、このガイドブック見て練習しといてよね」

「入国審査って簡単だろう！ 新婚旅行でハワイ行ったときなんてほとんどスルー状態じゃなかったけえ？」

「祐ちゃん、ハワイが特別なだけなのよ！ アメリカ本土はハワイみたいにアロハでスルー出来るような甘い入国審査じゃないみたいよ。ましてや、9・11のテロ以降、入国に関してはピリピリしてるそうなのよ」

そうなのかな？ 私は半身半疑で貴子の話に耳をかたむけた。まあ、用意周到にこした事は無い。

私は貴子から旅行に関するガイドブックの本を受け取ると、早速、入国手続きのページをめくった。

本によると、入国審査とは最初に着いた空港で行うとなっている。そのことを利用して審査の厳しい本土で審査をせずに、審査の比較的緩い、グアムやハワイでいったん乗り継ぎして、その際に入国審査を済ましてしまう日本人もいると書かれている。なるほど、まさに貴子の言っていることもあたっているのかもなあ。

まず機内で出入国カードを記入するとなっている。これは、新婚旅行の時に一度書いたことがあるから問題無しだろう。空港にいったら審査官に帰りの航空券と関税申告書を提示することになるので、事前に用意しておくこと。提示したら、簡単な質問がされるので、この問答集をみてはつきりとした英語で答えられるようにしておくとうと書かれている。もはや、アロハだけでは到底無理なんだな。本には、アジアで唯一のビザ免除プログラムが適用されているので、まだ、中国や韓国の人に比べたら楽なので、臆することのないようにと【】で注釈されている。それと、2004年9月30日以降、指紋の採取とデジタルカメラでの人物撮影がビザ免除者でも義務化されていると書かれている。

私は問答集に書かれている審査官との会話例に目を通した。そんなに難しいことは聞いてこないみたいなので安心した。

What is the purpose of your visit? (旅行の目的は何ですか?)

こう聞いてきたら、私はSightseeing (観光です) と答える。

How long are you staying? (どのくらい滞在しますか?)

うーん? 旅行はどれくらいするのだろうか? 貴子に聞いてみた。

「何泊するの? この旅行は?」

「あなたの体調次第よ」

そんな回答を聞きたいのじゃないって、貴子さんよ。そんなじゃ、審査官に別室連行されるだろう。

「真面目に答えてくれよ」

「何怖い顔してるのよ、旅行行く前に言ったでしょう。聞いてない祐ちゃんが悪いのじゃないのよ! それに

実際問題、祐ちゃんの体調次第つても本当のことじゃないのよ!」

貴子は少し顔を膨らませて、早口で言った。やばい、やばい。貴

子のヒスが出たらややこしい事になるからなあ。ここは一つ自重して素直に謝っておくのが得策だ。君子危うきに近寄らず。

「ごめん、ごめん。そんなつもりでいったんじゃないのだよ」

「じゃ、どんなつもりで言ったのよ」

「そう、イジメないでよ。貴ちゃん。まして何日滞在するの?」

「一ヶ月よ」

一ヶ月も旅行するのかよ。正直、体が持つのかどうか不安である。

「なんかあ、言ったあ?」

「嬉しいなあ、一ヶ月も旅行できるのかあ。めちゃくちゃ、俺嬉しいよ!」

「そうでしょ、いろんなところ行くだから」

どうやら、危機的状況は回避できたみたいで、貴子のご機嫌は直った。

と云う事は、「O u n m o u t h」(一ヶ月です)でいいのだな。

W h a t i s y o u r o c c u p a t i o n ? (あなたの職業は何ですか?)

うん? 銀行員って英語で何て言うのだろう? 辞書で調べてみよう。そつかあ、B a n k c l e r k っていうのか、なんだかあ、かつこいいじゃないか! I a m a b a n k c l e r k (銀行員です)

私は、その他2、3の質問の練習をした。よし、なんとかなるだろう。

この時までは、入国審査を樂觀視していたのだが……

つづく。

## 12時間空の旅(7)

私が入国審査の練習をしているうちに、どうやら飛行機は日付変更線をまたいだようであった。もう何度も見て、見慣れてしまった液晶画面には太平洋と、ポツンと画面の左隅に小さくハワイ島の地図がのっていた。

さてよお、と……ゆうことは、ここから時差が発生していることになるのだ。たしかあ、ものの本に西から東に行く場合は一日時間が戻るってことだったような気がする。いずれにしろ、今している腕時計の時刻は現地に行ったとき役にたたないってことだな。現地に着いたら、まず時間合わせしないといけない。しかし、時差って不思議で頭が混乱してくる。着く前から時差ボケになったような気がする。隣で相変わらず、音楽を幸せそうに聴いている貴子には、時差ボケなんて、おおよそノープロブレムなのだろうなあ。そのような、どうでもいいことを考えていたら、客室乗務員が夜食の注文をとりに、各シートをまわっていた。

「きつねうどん一丁おねがい」

貴子は金髪スッチィーに臆することなく、まるで近所の大衆食堂に注文するような感じで言っただけだ。

でも、きつねうどんって、そんなものメニューにあるのか？ まあ、あるから貴子は注文しているのだらうけど、夜食のメニューまで事前にチェックしているとは流石だと思った。

「お客様はどういたしましょうか？」スッチィーは私に聞いてきた。私は貴子にメニューを見せてもらおうとした時に、「チーズの盛り合わせお願いします」と、貴子の口が動いた。

スッチィーは私達に軽く会釈をすると、詰め所に戻っていった。

「何い、勝手に注文するんだよ！」

「だって、同じもの注文したって面白くないやん。そうそう、ここ



のチーズは美味しいとむちゃくちゃ評判なのよ」

「だったら自分がチーズ注文したらいいじゃないかよ」

私は少しふくれて文句を言ったが、貴子は全くの無視で軽くスルーされてしまった。

ほどなくして、私達の座席にきつねうどんとチーズの盛り合わせが運ばれてきた。その際に貴子はバドワイザーを注文していた。……

……「まったく私のチーズをあてにして飲む気満々じゃないか！ 貴子はきつねうどんをすすりだした。なんとも、うまそうに食べている。私もどんな味なのか？ 食べたい。」

「ちよっと、俺にもくれよ！」

「もつ、ちよっと、今食べてるのだから 待ってよね」

貴子はおぐもぐ口を動かしながら、食事を邪魔されて目が怒っているように思えた。

「はい、どうぞ！」

半分以上食べられてからきつねうどんのカップが、私のテーブルに置かれた。

私は、箸を手にとりきつねうどんをすすする事にした。まさかあ、高度一万メートル上空できつねうどんを食べるなんて思っていないかっただけに嬉しい気分だ。

麺を一口食べた時だった。突然、胃がムカムカしてきた。なんだか、吐き気がする。私は持っていた箸をテーブルに置いた。

「祐ちゃん、どうしたん？ うどんマズイかった？」

私の食べる姿を見ていた貴子が聞いてきた。

「違うよ。また始まったみたいだよ」

そうなのである。私が肺がんになってからの自覚症状の一つ、吐くという症状が出たのだ。食後、いつもなるわけではないが、時々起こる。

「ちよっと、トイレ行って吐いてくるわ」

私はゆっくりと座席を立つと、フラフラしながら機内通路をトイ

レに向かって進んだ。

二つあるトイレは幸いにも両方空いていた。すぐにトイレの中に入った。

私はトイレの中で思いつきり吐いた。苦しくて、苦しくて、涙が出る。さっき食べたものが、全部胃からリバーズされる。悲しくて、悲しくて、涙が出る。くそお、せつかくの思い出の食事だったのに……

トイレのドアがノックされた。

「祐ちゃん、大丈夫？　ちよつとドア開けてえ」

私はドアの鍵を開けた。ドア越しに貴子が背中をさすってくれた。「大丈夫、大丈夫。すぐに良くなる、良くなる」そう言って、貴子は背中を上下に優しくさすってくれた。

貴子の優しさに、また涙が出てきた。しかし……苦しい、吐いても、吐いても、ムカムカする。

30分ほど、吐き気でもがき苦しんだ私だったが、吐くものが無くなったのか、ようやく吐き気がおさまった。貴子はその間、ずっと背中をさすってくれていた。

「ありがとう、吐き気がおさまったみたいだよ」

「よかった、よかった」貴子も涙を浮かべていた。

トイレから出ると、客室乗務員と初老のスーツを着た男性が立っていた。

「お客様、ご気分でもお悪いでしょうか？」客室乗務員が聞いてきた。

「ちよつと、急に吐き気がしたものでして　吐いておちついたみたいなので大丈夫だと思います」

恐らく、乗客の誰かが、私達夫婦のただならぬ様子を心配して乗務員に連絡でもしてくれたのだらう。

「顔色がお悪いようなので、少し診てさしあげましょう」

私と乗務員のやり取りを聞いていた初老の男性が声をかけてきた。

「申し遅れました。私、高須っていいいます。いちおう職業は医者をやっております」

「いやあ、ほんと　もう大丈夫ですから……」

「遠慮はよくないですよ！　さあさあ、座席に戻ってください。少し診てあげますよ」

「そうですか、どうも高須先生申し訳ありません」

人の親切心をむげに断ることもあれなので、私は高須なる先生に診てもらうことにした。

## 12時間空の旅(8)

高須先生なる医者も、どうやら私達と同じファーストクラスの搭乗者のようだ。診察の支度をしに、先に自分のシートに戻っていかれた。

「どうするよ、貴子？ 正直に話したほうがいいかな？」

私は、肺ガンである事を高須先生なる御仁に話したほうがいいのか、迷っていた。私の質問に対して貴子は何か作戦を練っているのだろうか？ 私とは目線をあわせず、どこか他のところに目をやってる感じだった。

「聞いているの？ 人の話」

「ああ！ あああ！！ やっぱり、そうだわあ」

貴子は突然、驚いた表情で言った。何がやっぱりなのだかは、私には見当がつかないわけなのだが……

「どうしたんだよ、何か思いついたの？」

「うん、あの高須って先生、どつかで見たことあると思ってたんだよ。ほら、CMでお馴染みのYES 高須クリの人じゃない」

なんなんだ、YES 高須って？ もしかして美容整形のCMのことを言っているのだろうか、それに、私が聞きたいのは、高須先生に肺がんである事を打ち明けたほうがいいのか、どうかを相談しようとしてるのに。

「よし、思い切って聞いてみよう」

貴子は、私の相談事など眼中になく、頭の中はヒロミ 郷のCMのフレーズでいっぱいのようなだった。

とりあえず、私は診察されている時の状態を見てから打ちあけるかどうか、様子を見ることにした。

シートに戻った私達は、高須先生がこられるのを待った。ほどなくして、高須先生が診察道具を持って私達のシートにやつ

て来た。

「お待たせいたしました」

高須先生は私の座席の横で中腰になってくださって問診を開始された。

「それじゃ、口を大きく開けてもらいますか」

私はあーんと口をあけた。

高須先生は片手でペンライトを当てて、口内の様子を確認された。少しの沈黙の後、高須先生は言われた。

「ただの風邪ですね！ 扁桃腺が少し腫れている程度ですよ。一応胸も開けてもらいますか」

私はシャツのボタンをあげながら思った。ただの風邪のわけないだろう！ きつと胸を聴診器で見てもらったら、わかるに決まっている。私が肺がんであるってことが……

私は見てくれといわんばかりに、シャツの下の下着を上にもくりに上げた。

高須先生は聴診器を胸に当てる。

「はい、大きく息を吸って、吐いて。次、背中見ますね」

私は高須先生に背を向けた。

高須先生は胸を見たときと同じように背中に聴診器を当てる。背中に金属特有の冷たさを感じた。

「うん、異常ないですよ」

私は、耳を疑った。そして、隣で心配そうに見ていた貴子に目はどうしたらいいか？ 合図を送った。

貴子は、私の視線をそらして、高須先生にお礼の言葉を言った。

「どうも、先生。ありがとうございます。ただの風邪だと先生に言ってもらえて、とても安心できましたわ。主人には、安静にして早く風邪治してもらいますわ。でないと旅行が楽しめないですもの」  
貴子はぬけぬけと、高須先生にそう言うと言った。愛想笑いを先生に見せた。

「風邪を治すのには、十分な睡眠と水分補給が肝要ですよ。それじ

や、お大事に」

私と貴子は再度、高須先生にお礼を言うと、先生は自分の席に戻っていかれた。

貴子は高須先生が席に戻られたのを確認すると、待ってましたとばかりに話だした。

「祐ちゃん、ただの風邪だつて。よかったじゃないの」

「良いわけないだろう、ホントの事言っただ方がいいのに決まってるじゃないかよ」

私は、高須先生に診察結果を聞いた時に、貴子にスルーされたことを根に持っていたので少し怒り気味になっていた。

「なんで、目で合図したのに無視するんだよ」

「何怒ってるのよ。正直に話して、もし飛行機が急病患者のためだと言つて、目的地に着く前に着陸とかしたらどうするのよ。祐ちゃんは、今現在、私に文句言えるくらい元気なのだから、それでいいじゃないのよ」

貴子は、全く反省することなく、ズケズケと言いたい事を言ってくる。こうゆうのを逆ギレっていうのだと私はしみじみと思った。「とにかく、先生も安静にしなさいって言っていたのだから、文句言つてないで、少し横になって寝たらどうなの」

貴子の言うことも一理あるのだけど、なんだか寝れそうな気分ではなかった。

のどが乾いたので、スツチーにウーロン茶を頼んだ。

あと、どれくらいで、シカゴにつくのだろうか、モニターを確認してみる。

シカゴまでの到着予想時間は四時間二十分となっていた。距離にして、あと四千二百キロ。

機内の外が明るくなってきたので、機窓のカーテンを少しずつらして機外を見てみた。

飛行機は海上ではなく、いつのまにか陸を飛んでいる。ってこと

は、アメリカ大陸にはいったて事だ。

モニターの地図を確認してみると、アメリカ西海岸上空を飛んでるようだ。地図の斜め下にはロサンゼルスと英文字で書かれていた。私は、いよいよアメリカだと思う期待と、病気の事が気になる不安が心の中で押し合いへし合いしてるような複雑な気持ちであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1023d/>

---

アゲイン

2010年10月11日18時38分発行